朝夷巡嶋記

第五編　卷五

イ13
939
N25

413
939
11

帝国図書館蔵

壁ばかり死なるよ難ばるやハあり然れども刀もく晴がるく物見えく彼見

えの短刀を借りもりく身を殺さバ使是姫えよ撃れまるよ敷かんくても

罪を贖えれ嗚呼ちの形りと遷しく守獲刀を取ええく舊の処よ坐を占つ

諸肩祖ばく技故つ刀の光よ且見姫ハ禁やんと立あゞる足え癪つ傳の森

織の素ちろあくバ断も絶ると胴よのめくく引留られく爵居よ撲地と伏

ゆかくし程よ豪三郎ハ勝よ短刀の鞘推立く左るよ腹ど拭えるつしえ

かくばかりと意中よ工夫の眼を閉く雲時念ゆ六字の名號又短刀取ゆく

単衣の袖よ巻篭つ餘ば刀尖五六寸夏ゆ寒ば豊城の霜乎水乎明晃々

る刃の光り今ばよ眼を射られ眩撓くもゞば悵るる志ど勵く

力ど究めく両ゆを付る目織ハ左の脇腹へ刀尖貫禁と突立れバ滅と潰る

鮮血と共よ雲時も堪ば苦と叫びく仰え倒れく苦む隨よ旁側よ臥るる

梭枝が腹を足もて礫と衝くバ梭枝ハ一声云と嘈地に忽地に倒れて頭を
擡身を起しもあへず いふと驚く声は藁三郎ハ羞こうれん苦痛を忍び左を
つ足立膝折回して起直る半身既に血に塗れて瘡口より頭れ出る大腸小腸
膝を掩へく松に垂る秋蔦若に掛り海藻に似て合る刃ハ放さじとも
尚刺立る仮なれども深疵なれバ心つ足更び梭枝に向へく潛然と合泪ぬかるる
近つ足噫浅ましき藁三郎とのおどしや栗を拾ひ取ると勸めて
姫こうの為歎を増せるものを更び又つもあるは蒼里なる丈夫の弟は自殺せしハ
忠義ハ作こと真中も缺こう女子なりとも恥を知る志ぶは空しうして義理ハ
易る道ぬ〻ひでう後れなんやとその身を責る必死の勢ひ藁三郎が側ま
措る行方を撥取く晃りと技く吭を刺貫んとしこうを巻住へく乳の上四五
寸ばかりを鞘を握く俯こうるるひ〻ひく又さいふ梭枝が自殺の形

勢は且見姫ハ立つ居つ絆は狂ふ意馬心猿走よんとはるは身の隨ならぬ逆
被人とうなる声ぬ悲歎徒は魂癡れく伏沈く泣まる外の赤芝ハ

後輯第四十八

今果の名對面
新鬼の新尼送

當下藁三郎ハ梭枝を佶とえうく為ぬ婦人の傷害某がこの自殺の趣
終は夏賀殿は姫ハ彼疑ひを解ん日ぬ怜悧なるもハ似ぬ便りなく発
姫こうは仕なんとハ思ひ求へくその死を急ぎハ婦女子は相応ぬ名聞を
好むはあらぬ且蒼里なる丈夫の弟といれハこうの狩所以をおもひぬ。
と問へが僅は頷へく今ハ何とう慮むぬ
名吾こうのよく驚へく原来なん身ハ嫂こうり狩ひ〻ぬ〻れバ心ひく悪間ぬ
こうバ又何ぬの故はこうぬ兄とハ一処は住ぬこの荘院は住こる又始より某を良人の

弟と知らず狼と誹り向ひされバとその足を恥しめ給ふ本末告んと稀しけるハが父ハ
鎌倉なる小壷の濵の漁夫字を浦平と喚れしもの母ハ夭く世を逝りつゝ家ハ只
親一人。女児一人のミありしかバ悪しき親類なれバ父ハ只管こゝへが為に招聟をのぞ
いそがしく是彼と求る程に那身が舎兄穂之助ぬしが浦里に流浪て魚屋の小廝に
ありあひしを父ハさる所やありけん主人にもらひて迎とり浦太郎と更名つけて婿瑚を
整られしハ五年前の春なりしその歓びハ良ことも変る哉ことし年の八月廿六日の
夕暮なりし親浦平ハ小壷の澳なる鰐に隻足噬断れて果敢なく命を隕しぬ。
是より海の幸なく浦人もまた生活の便著を喪ふきが中にも家財の借財の
債ハ素より多かれども良人ハいそぎ鰐を殺して婦翁の怨を復さんとて種々なる
鈎を求め又種々なる綱を造りしとしばしかれども竟に獲ざりしてや赤役をまへて。
いそ煙ハ細りとり和田の御舘に給事せる叔母に聊資られて両年ばかり暮せ

夕ども さそあるべきよしのぐずれバ竊に良人と相謀らずして速くこの郷なる由縁ある
旄くこの荘院へ給事ゆるさく乞ひしハ去歳一昨年の冬なりしが家貧くて術なく
夫婦が飽ぬ別をしてかの鎌倉に在んすれども面かれども去かれがまかるへ
来りしより姫うへの大くかぬ我身籠を被させ給ひし過世ありけん主従の縁
とぞ思ひ給るされバ我身のまかしも豫て良人の物かたり聞くその若き里も云云の
事情も知りて待らくまだ対面せぬ前の日より間中の卿しが噂しきく復讐のくわ
その餘の誠心説示されし折々に外のよしとハ都さを思ひかくて又思ひかけなくいの日の月の
下弊我身が鎌倉より来まて在してされバ心中に弥増くいと老実なる挙動なと
憑もしく思ふて素生を隠して告ざりしハ亦是良人のおかげにて弟が丈夫豫くせることもあり。
まず弟蓑笠三郎ハ其の性の老実なる親同胞をおもひて敦かり苗四郎六人百年の後涙ハ
必これを家の家を継せんとてを譲られたまはれ亦親のおかげを蒙りて。

弟に家を譲らん為に故郷を去りしあの阿容こと千く迎らえを生涯
隠れく渠に遺ずとあはこれなり城ありてよひろ藁三郎と名告く人の
こびるるとも、あるべしかへせうといはこしるの侍かり縦これらの輩
あくともこれをそれ分の嫂なれと名告らず死秋山難の尾上隔て妹と扶け形
死世の形死身を慰くつと隠しなど心の底ハ疎くなる。姫人の死為
鎌倉なるこが叔母許秘密の使を事なるも縁に繋る死身にあれば今もあるべ
感ずるもそれ成就せずんと死しあをひきの禍れ起らんとハ現姫人の
死歎死ハ今はまさしく侍り良人の為に故ある弟に自殺せしもが所行と
衛鮮沖よりも死まに共に死ぬる姫人と良人に贖ふ自刃の刑罰吾身に
悲しきハ弟ひとりなく死。氣を失ひく事に後れ死身に命と捨てるる。
後悔の詮なれども丈夫なれ身し著悔義信の人なくまでに皆薄命

なりしハ過世の形業報なれ素より賤死身なれバ幸死ハ現常なる。
死痛き死ハ姫うへなるまぐ懲文の索も妨鮮ぞ御先途も果ぬ。
隨ふる死ぞ女子に似げ死ぞれども且くも存命なる情由ハ聞呂れん。
間中隼人が還り侍ばバ云云と告させあひく忍れぬ世を忍ぶ。御運も
開くべし。そこの侍死ー侍とも影に立形に添く護りまうんとそ侍れ
惜ふる名残ハ下方なるべ必バ果敢なるこ丈夫よきに初く諸まく尻うけ
東尼物いはしーもこの世の訣にありもり悲死ぬと周諍ぬ公道人情死
悲しく花も実もある忠烈節義の妙なるまと魂を散ぬハ惜死今果ぬ言の
葉日まろにあるく雄さー死ぬ一言毎に蒼口より漬る血と吻く息と声に細りく
俯沈めバ藁三郎ハ低俯く耳を澄せー頭を擡く感涙坐に目を赤ばく死遠
微妙死烈女なる今その言のありせバ兄の艱苦も嫂の節義もまくで死んのこと

歎くいと哀しく又憾しく思ひ。これハ年来心を竭しく舍兄の往方を索ぬる志を切遂げ難く今自殺せるのみかば嫂前の自害もとが疎怠なる怨より事起るり亦これをも哀ぶんやさるを舍兄も又嫂前も或ハ一室に処り或ハ途に相遇ふくも由縁を隠し面を背けく心つよくも今の日まで徒に過さしめひるを亦憾といへどんや幾一碗の糧をもろもろく絶へ飢渇に充ることも又一領の衣をもろもろく交寒暑を凌ぐとも兄弟一郷に住ひて共侶に世を渡らバまだよ憑しく兄ハ弟を捨てひ家を捨て往方を索ぬ弟ハ兄を慕へども遂に値で嫂の命を縮めて兄を殺せ只是過世の讐敵が生うへりく親子とあり同胞とあり夫婦とあり天道人を殺せといんこれを過世の業報と観ればこれ恨なきとハ思へども遭で別れし舍兄を慕ハこれ矢口の渡やく遠外に出でハ嫂前を訪ふくのうへさまを今日に暁れども六日の菖蒲にあらずや何ぞせんと悔歎けバ梭枝ハ閉る目を睜りく現そのうつゝみハ理りくきのふとが伏の来ぬしとこれ弟が忠孝実に報しバ伏ハふく感嘆しくこれハ弟が実父の留四郎六人ハ壬寅年枉死しぬ痛しく哀しけれ弟が精悍しく仇の軀を刺さと欲ひを義ぬ死孝烈これハ継父の枉死をあくねば復讐のすハさゝ嶽父の為に鰐を殺して怨を復すのもの遂に妻ハ家の女あるも竟に新水足らぬしく人の奴婢傭婦にあらうかれバこれハ蒙二郎に及バざるのいとく遠ろあるのよりを凍う凍ハ只管勤めく舊里へ相伴んとそを思ふれさでハ弟の功を竊む恥あるく且義ぬ慝ても賀ふく慝てもうるもこれ弟がうへ人も渠に対せ恥ひとこれハ只舍弟をもの誠心これバけあるでもまそでこれ弟に告ぶりを斯も諦ぬ迷の問答良久に陥るあるもこれ未期の一句に

ありかたり今ハいと是まで有り三途の瀬踏をせべらんといふく刃を抜んとなるとバ
藁二郎声を激して曰よ俟也疾ハ浅り炎所を外れ出くるとかの
まで療治しく主君ハ仕へ良人を資く後の栄ハ遇あるべくこハ世も果て頭を
うち掉りあらもなるまいのかまうぞ男甲斐死女子ありと云死者と共死ぬを厭んや
絶死と為る氣を張りく且くもこの心ハ死刃の惑ひを解んあるべ只土とあるバ
なれ魂ハ鎌倉ハ起居く殿ハ彼交計を告訴歎死きりく去られ姫ハ人の
死実の科を釋でもハ死なるもこの甲斐死ぬと奨られく藁二郎ハ左右を
小膝ハ突立くれも寄ても寄れ後れハせじと引抜く刃を取直なハ多くて
駐るべくもあくざれバ左の拳ハ持そく吭丁と搦切く刃を捨く撞と俯せバ
桜枝も含る刀の鍔ハ生血を流しく枝桜る刀尖直ハ咽喉を刺串ぬく
枕ハ俯とりる持ハ出居の腰障子を外面より颯と引死く忽地内ハ入るあ

あり便是別人なるべ間中隼人守直と引提る張燈を推抗く両個の死骸を
左見右見く嗟嘆つ遽しく張燈を承塵の釘ハ引掛く閃疲れて俯せ
且見姫の縛の索をとくく解捨くまくハ勅りく事の趣を咨よくれバ
且見姫ハ稍涙を飲めく六約その首尾藁二郎が鎌倉より来る
條ハ光仲の歌及鮓のハ藁二郎が謀く彼一包を時政の第へ齎遣
ハ且その忠直桜枝が節義或ハ自殺を禁んあるハ身を拉へ繋死留やる
或ハみづく非を責く俱ハ命を隕しる桜枝藁二郎ハ儔罪ハ心操今般ハ
ひしくハ悲も涙とハ報ハ守直ハ毎ハ且驚死且感しく
息を吻とつく某ハ来しく片ハ両人ハ自害しく救ハ
ひとを笑んあるハ提燈を遠離く霎時彼処ハ立在程ハ桜枝ハ
藁二郎が嫂ありしハのハ今又姫ハ人のと死示せあるハ

その苗の起る所彼が忠勇義死の趣曲は知りく驚くのみも歎くともその注
ゐく惜めども逝るべくもあれども姫うへ悲のあまりはかばかり幸なれ中の幸ひし此度
鎌倉へ密使の某八初より陌者なるよ有ねども姫うへの歎を慰まあ
よしなれば蒙二郎校枝が頻りに勧めるいれも篤義のあるべきれば
怒をはもあくで彼龍潭に臨ばば終は明珠を探りくく又虎穴に入らざれば
虎子を獲ることあんとあるべよれば。意は仕しく漫な事を行はせ八其
亦千慮の一失後悔あるよ立くあり寔にこの義男節婦八その身賤しくれども
その志貴く事は怒とゆどもその主を救ふ足り當今ゆく元真成人あるか
果まへその死を急ぎ八天とゆいへ命ゆいへ惜べく憐べく賞べく
悼べく姫うへ此度の窮厄八原是内々のすれば釋あるべきあるべんもこの
敷紀沈まゆひと事の難義八これのこゆくべ又一條の厄難あり某郷が

郷郷の荘官瀬越小権太は招れくその宿所へ赴ぎ鎌倉より市別當代とし
稲毛太郎重平の功曹橘間苦六と名告れるあ許多の火兵を率く下向し瀬越が
宿所は嘆くより則某は對面して彼河前司廣綱のすり曩は陣中より
逐電しく公命を蔑如せしその科尤軽くに縱その婿寻賀光仲ありと
いへども亦是れも亦是を蒙りく和田左衛門尉は領けられうされば廣綱の
荘園八官府へ納めるべきあるべ今はその義をもうしぬ八家隷ホが
横領あるべ又光仲の内室且見姫八太田の荘院はありとゆけり夫光仲の
すは就く問せあるべき旨もあるんかまばその家隷ホ太田の荘の券書を
捧げく且見姫ゆう共はもくく鎌倉へあるべきあるべその淺内の沙汰を
ゆく執權の密意ゆより稲毛殿下知せられう縱台命ゆとも執權の
密意を稟て斯穏便の議を示ばは惑ひをとりく遅せばば推蔓く

捕ん後悔を虎威を借る胡論の指南ハあらはるゝ某これをうも
やく太田の荘ハ官府より宛行れしあるを廣綱の別業ハ光仲
その婿と廣綱の往方あればとゝも光仲の指揮あれバ台命も従ひ
かゝ況一通の下書も宛執権の密意かゝバ兼引べくもいぶ又且見姫を鎌
倉へ進らせよと欲そそ下知ともあるを後光仲罪ありとも何でか女儀ハ
軍中の身をも問まん。つゝくまろを捕くに宛すゝさ且見姫ようを告
有無の答をもゝ入るゝ。今宵一夕俟べくとその期を後べく退りうかくく
久さよ途にぐゝ倩と思惟ふこハ只稲毛ゞ執権へ侍眉る私意かゝ
る沙汰かゝねども鄙語ハの弱躬ハ崇あり四辺へ水も溜れバ明日あさ
り回答をせびを苦六必推葛来く狼藉ハ及べゝ今宵姫うへハ倶
彼伊豆の愛玉ゝ藍玉院へ走らゞもとゝへども苦六をもくれをあゝバ

大勢を招く必追べゝ大厦の倒れ一木のよく拄べ宛ハ
ぬと偽りこれを苦六ハ遁与かバ渠実ゞとゝく油断ぬんかを愛王へ倶ゝ
後ゝもゝべゝと真ゝもく密語バ且見姫いつくゝと涙さゝ謀ハ
いとも吾倩の母ハ桜枝ハが自殺せゞを惜宛荷且ゝ難を通れとて又
その首をゝ落させく仇のゝハ遁与ハ忍びゝ宛ゝ稲毛太郎ゞ功曹
ハ鎌倉へ引そゝれバ親と良人のあを恥も恥ハ死後れく今又かゝ不祥を吏
刃ハ伏ゝを易けれどもそハ桜枝と豪二郎ゞ志を否ゝ宛ゝ死ゝバ稲毛
ハ辱ゝをいつ忘んをもかくてもゝぶ丈夫の疑ひを解くあゝ故ゝ素ゝ薄
命ゝれバ菖蒲の尼公を請ゝ尼ハあんとゝひを家尊の大人の禁ゝ
多賀殿ハ妻せゝれハ過世短宛縁ハありけん犯せる罪ハあれども忍地ハ去ゝハ

死とあらば死前の世の約束なるぞあんぜん願ふハ佛の道に入りて丈夫の厄難
消除を祈念し給へ人さの菩提と吊ん給ハ丈夫の疑ひもみな〳〵解せぬべく世を
捨て出ぬ。家尊の大人まあやまあんかくそ思ひ決められとひも詫らで
血に染る護身刀を取あげて頭髪を弗と前髪ハ守直大く駭き驚て
浅ましやいかれハ短慮なる夏ぬ此るよりこの弊の故をもて多賀殿疑ひ
とも正しく去らせぬ〳〵まあ〳〵姿をとゝえさせぬるを再會の日もあるべきまに扶ふも
道世なる。嗚呼何とせんと悔歎けバ且見姫もまた落る涙を袖に禁ひ
守直さの感こゝを世に法師ぬるあハ罪あるも刑を宥めて免されぬとて
なれ。さてこの頭髪を稲毛が功曹橋間とぞんに贈りかハ渠又逼て鎌倉へ
おく還んといへ〳〵やハかくて道中後ぬ〳〵伊豆國愛五郎尼寺に赴かく住
果んとぞあれ准備をせぬ。とぞ守直頻に嘆息しく既かくの

ごくなるとハ禁めなるよその甲斐なく思れどもその丸頭髪を苫六ぬ取
いと朽をもぬ〳〵しそハ某ぬ〳〵時ぬ〳〵ぬ便を微めく多賀殿の進の
せん又橋間苫六ぬハ桜枝が頭髪を剪取く欺かく姫ぬ丸髪とぬられも
遁与さハ事両ぬ〳〵全ぬ〳〵かるとハ死しぬ桜枝も功ありこの議に従ハぬ
浴やぬ諫るハ姫ハ僅に領かく現桜枝が頭髪をぬく仇を欺んと欲ぬ
ぬるあ〳〵入死されハ法師に請ぬく浴せ後剃しく祇に歛ぬ丸ぬ
謀ハ守直ぬあに任せさハれ吾倩がこの黒髪をぬ赤ぬ賀殿ぬ
せんと欲ぬるとも桜枝豪二郎ぬ世を逝ぬくハ誰をあ〳〵に音耗せんぬ
丸ぬれどもこの侭ぬく遠離らハ事の情の迹もなく只丈夫をのこいとう
怒ぬく姿をかえ〳〵とぬるん〳〵ぬ一下筆をそんとく硯筥を引よしく復紫の
服紗のうへ。まづつまぬ丸名をぬるぬれ丸ぬあまぬ好ぬ丸ぬぬありけく斯

一歌を書つけく光仲より還されるる二通の人素と像見の扇とうぶ黒髪を件の
服紗に巻籠く遍与ハ守直これを受とりく歌と懐に交やつ接枝が頭髪を
剪取らんとく死骸のほとりく立る折く忽然とーく前裁の柴垣の陰より
橋間苦六隊兵を引く真先に顕れ出たりこれ怎生ぞ打拾を但ればこれ皮膚に
品草衰の裏田して腕に細鏈羅の臂縛透間もなくとり領ひ足に鐵板の篠
煙衣ーく紫金裝の大腰刀を佩ばれハ白鐵の十手を頭短に握合して禹歩を進み
近つくとそれ守直嚮に汝が陳せし趣その期を延ーく活路を求るあらんと積せ
ばこれを迹を跟て来つこの前裁の樹蔭より事の為体を且窺へばいつの
程か人を殺して剥ぎの頭髪をとりく上を欺んと欲ぶるを大犯不赦の罪入れ
主従倶にとく出く奈を被れと通ハ守直驚く氣色もなく力を取て信と疾視
推参なり橋間苦六鎌倉殿に徴れてをり辞ーく来ぬ駿河前司の莊院に

泥殿踉込く且見姫を抱く去らんとハ猿猴が水澤に臨そうるを月を捞ふに
似たり且汝が遍迫ハ執権の密意と称ふる主の稲毛が私淺なるふ縦辞と年
しく轎子をもて迎とるもこれ姫を人を遣与らんやとく還れと罵りく
袴の稜とく脛高に引揚る勢ひ悍ぬも一個の歇をとなん梅る苦六ハ
果さじ頭ぬまに怒く物をいはせて彼索被けとく敦圉嗜ばれ駄兵ばうけ
ぬると恐もあ庇れ組伏せと先を争ハ縁頰陝ーと競蒐をあくしと
守直ハ大刀を真額に技聲ーく擊靡け巻振落ハ修煉の大刀風烈ーく
當るくもなくばれば捕るの大勢辟易して或ハ縁頰を踏外して仰あ小落
わり或ハ巻石に跪ぬ倒れく身方に踏てあめもあく拉足もあく慌忙て左右へ
ぬ紀靡くよ守直ハ且見姫を扶掖ぬ先に立く面もぬ廣庭へ走り
庭門より脱去らんとする程に苦六ハ諸折戸の小ぬ蔭に立てをり牛も遣ぬと

声々に撃ち合ひ刀の光りは宇直を巡り身を反らして。あちらこちらと受流し送の大刀音丁々發矢といとも烈しく戦ひは苫六を巻き囲み互に共に後へ引きバ。

駆兵は再び群がり来たり喚き叫く攻かれども宇直は些も怯まず且見姫を後方に開き右は當り左は拄へて且く防ぎ戦ふ程は嚮は懐は奏うて且見姫の髪を包の侭は送せども取あず暇なきを苫六は彼は澄据はなべて。

兵共を取られじと声を立て罵るバかりを一個の雑兵件の包を掻取るその侭内へと投与へを苫六宙は受とり守直これは喜び。

いざ包をとり復んとて焦燥進て戦へどもその身金石のもわるれバ脆疲れ目眩く主を失ひ暇なく獻ハられは勢ひつきて葛隔折重りて捕縛を聞き苫六はその間は且見姫は目を覚く立逃るを飛ぶを推奪ひ包を口は銜く素を被んとすれバ且見姫ハ禦ぎ吐嗟と高く叫びの声は驚く守直も竟は大刀を打振りつ小刀を拄ぎ勢既は究りく脱れ難しとを折り陰霾る雲月を隠して朦朧とある隠は夏の夜風の常あるを肌膚を犯し可ありとれバ女屋のかさよりて西圃れ鬼燐内紀く且見姫と守直が倒れ撲地と落るまく風又颯と音立て苫六が口は銜く服紗包を奪ひ放ちく空ざまは吹揚れバ苫六大く驚騰て足を翹手を抗て追奔とある程は忽地は筋斗まく獻ハ投られ。

それハいざと驚き騒ぐ捕ふの大勢紛々と野の獻は討さどく東は羅紀西は走りく同士撃をるの形ぶ身を轉く撞と倒れ起んとしくを又輾ぶおのく怪有の敗北ハ獨相撲は彷彿う守直これは力を抜く度を失へる大獻を蒐散く追退けく苫六を撃んとるは刃を引く逃走を兎程は追捨く且見姫を扶起んとくこの隙は落さぬと誘引立く庭門より。

義男節婦
妙ゑ且見
姫を拯ム
橋間若六
河中隼人
旧間蛇
廿四

廿五

やんとなれバ又簇こと追掛んとそ聞く敵と守直佶とハ久しバ落とり近くも
ありつゝ投らそと初のごし就中苦六ハ頭を石に撲して流さ鮮血を禁めあんじ
ゆるゆくと叫びけりそれ桜枝と葉二郎が亡魂の頭れく殿の敵を蒐悩くる
両個の姿ハ在鮮と且見姫の目まのゝゝ恐魂義膳の傳稀なる死七の後
かゝまでまゐりけるあ秋とも泣く云云と告ゑバ守直頻に感嘆くく原来両個の
亡魂が今宵の危難を救ひゆゝりかれが彼下包と空中へ吹揚られ行く只今取ふ
由のくとも再び如る日もあん送憾ゝ桜枝葉二郎ホが亡殿を
歓め葬ゝ眼あく年来住熟あいせ〳〵社院さへこの侭よりも捨て走らんゝいと
朽を限りあれども今ゝふせんを〳〵焼ゑとそいをゞ〳〵やくといまゞ
いくむゝ〳〵後方に物の音ゝを何あゝんと訝りく主従齊一ゝ人ゝ入れバ
居のくゝに猛火起りく棟毎にゑ火ハゝゝつ弱り伏る苦六ハ殿の捕共の

頭の上に落花のごとく降りかゝる焔に焼れ煙に噎ぶ衆皆慌惘ゝくこそ
そもつゝと叫びあゝ起んとしてハ轉輾び逃んとしてハ跌ゝ倒ゝ周章騰て
いゝ〳〵脱ゝあゝなつ虫の火虫のゝれゝ〳〵焼ゝごとく狼狽ゝく猛火の
中に迷ひ入りて死るあ千人かゝく九人に及べりそゞ中に苦六ハ殿兵衛に両
三人と辛〳〵て火を避れども髪を焼れ衣裳を焦して先ゝ庭門より出〳〵く北のゝ方なる竹垣を推倒してそ逃去りる主従遥に
是も亦彼亡魂が殿を自焼せんとて狭承塵に送せ張燈の火を移し家を燔く
夥の敵を亡けん寔に不思議の義烈ゝ南無阿弥陀佛と念〳〵く涙をゝ向の兵
回向頻に菩提と合掌の袖ハ露けゝ旅衣住方ハ伊豆の愛玉とゝの亡魂に送ら
ゝ茶毘の光に〳〵夜の路を求やく落ふあ〳〵果敢なき世ゝり。

朝夷巡嶋記全傳第五編巻之四終

朝東巡嶋記第五編附言

吾翁の藻を綴るる毎に神速にして泉の竭ざる如く筆下に玉を球出せるを世人も皆よく知るなり。又この編は初巻より第四の巻まで今茲皐月に稿本成るなり。

今后酷暑焼がごとく秋来れども夕風稀にこの故に避暑に業を廃して四五个月を過ぐる程に年既に季冬に邂て第五の巻は漸く成らんとす。書肆は時と後るることを彼は犬傳第四編の巻の足ざりし例もあれば今則果して四巻を輩て願は早春敗んとのみ翁已にこれを許して余にこれを識しむ。されども第五の巻も昨既に終了れり。年内剞人速に亦これを鐫出さば迺一帙五巻なるべし。されば第六編の巻の首に置んと今稿本を閲するに第四の巻の終は至て義邦光仲が黙阨はその趣を畫して第五の巻よりのちくまで義秀の進退を寫し出さんはやとなん就中北越山中の奇談越中岩神の

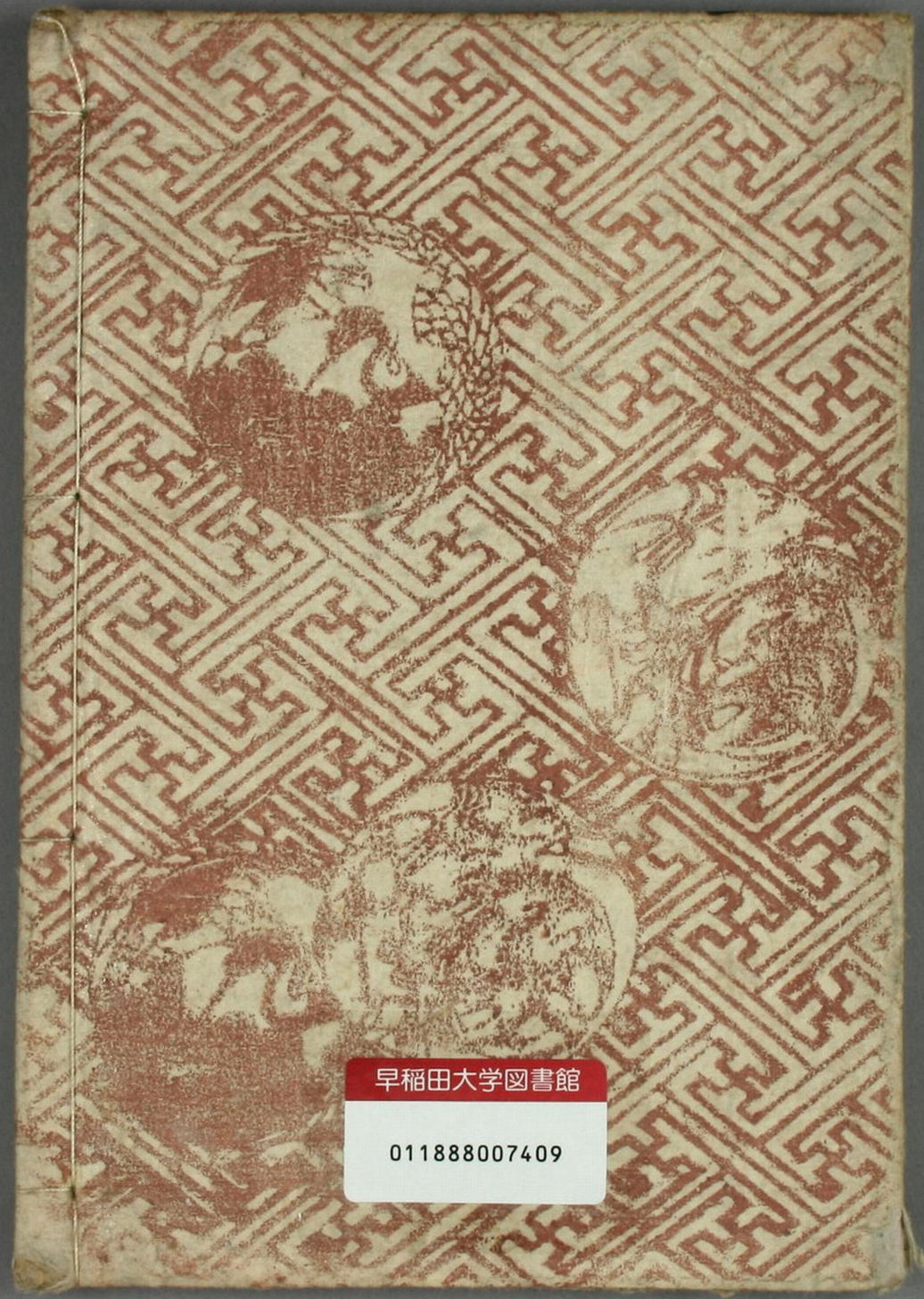
拙舗累年書籍ヲ鬻キ近来都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸府縣廳或ハ諸先生ノ御蔵版アル毎ニ幾兒ヲ命セラル故ニ新板圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋北久寶寺町北九番地



早稲田大学図書館
011888007409